現代文学を伝える
～ 山口での自作朗読会 ～

ヒンターエーダー＝エムデ・フランツ（本学部教授）

たどたどしいスタート

「これからずっとこうやって邪魔するつもりですか」オーストリアの作家ペーター・ローザイ氏は、やや不機嫌そうな表情を浮かべている。朗読会がいよいよスタートを切ったばかり、そのとき、トラブルが起こりそうになったのだ。日本語を担当した同僚の今田淳氏と目が合った。ドイツ語の一節毎に日本語の訳が読まれると前もって説明したつもりだが、初めて日本の地方で朗読会に臨むローザイ氏には十分に伝わってないことが分かった。氏は、まだ来日して１、２週間しかたっていない。今までは東京や京都などで、主にドイツ語を母語にする人々やドイツ文学者の前で自作を朗読してきた。地方で行われる朗読会は初めてで、一般社会人やドイツ語初心者の学生たち、つまりドイツ語があまりわからない聴衆を前にしての朗読会は想像もしなかったのであろう。

山口でドイツ語圏文学の朗読会を行うことになった一つのきっかけは、1991年の山口日独協会の設立にさかのぼる。協会はそれ以降、文化的な活動を行うことになる。70年代ドイツおよびヨーロッパのフェミニスト文学における第一人者ベレーナ・シュテファン氏（Verena Stefan, *1947）の朗読会、あるいは『メン・妻の恋人とつきあう法』で世界的ヒットを放った映画監督・作家ドリス・ドェリー氏（Doris Dörrie, *1955）の講演会を1994年に催した。現代文学・映画などの分野で活躍中の人たちを山口にもっと紹介したいという願いから、来日中の作家たちに声をかけて山口に誘ってみることにしたのである。はじめのころは、日独協会と大学で別々に活動してきたが、力を合わせて、文化・学術活動を進めたほうが、効率的であると判断し、やがて共同企画にチャレンジすることとなった。

そして1997年やっとペーター・ローザイ氏（Peter Rosei, *1946）の来山が実現した。両者がこういった試みに十分経験を持っていなかったために、一瞬冷や汗を流す羽目になった。ステージ上で改めて私たち主催者のほうから「山口の朗読会」のあり方を説明し、理解して頂き、朗読を続けてもらった。そしてそれは興味深い体験になった。ローザイ氏は、自分のドイツ語のパートを読み終える度に、注意深くその和訳の響きに耳を澄ました。これが自分の作品の日本語の響きなのだと不思議でたまらないような表情だった。このように自分の作品が微かな面影を保ちながら分からないぐらいに変化していく。初めてのことで、如何に新鮮な体験だったかということは、後の懇親会で本人が語った。作品は断片化され、異文のパッチワークのような、新しい作品のように聞こえてくる。本来は作家にとって受け入れがたいことだが、新たな可能性も孕む試みだとのこと。その時に、私たちが考えた朗読会のスタイルが如何に作家にとって馴染みのない、新しい形をとっていたかということを意識させられた。はたして異言語間において、文学の鑑賞は可能であろうか。この課題に挑戦し、朗読会はこれまでに定期的なイベントとなってきた。過去10年にわたる14名の作家による朗読会を振り返ながら、その意味や成果について考えてみたい。

朗読会の聴衆が、馴染みのない言語の文学を鑑賞できる方法は、翻訳である。しかしまた、文学作品を著者の肉声で楽しめることにも別な味わいがある。ドイツ語圏からの作家を迎えたときに、様々な形で朗読会を試してきたのだが、あるときには訳文又はドイツ語の原文や、時には両方のテクストを用意して、配ったことがある。しかし、注意がもっぱら資料に向けられて、ページをくるたびに、ザワザワと音を立てて、どうも、朗読会にふさわしくないようであった。音楽、絵画や彫刻などの芸術メディアは、言葉と思想を超えて直接に人間の感覚に伝達できる。文学は言語を通じた人間社会や文化の複雑多岐な表現であり、直接な異文化理解に適してないように見えがちである。どうや

って、このハードルを下げて、異言語の文学をより多くの人に親しんでもらえるかを考えたとき、二重言語の朗読会が思い浮かんだ。そして試行錯誤しながら、手作りの朗読会のコンセプトを考案してきた。

しかし、作家の方は、元々このような覚悟がないため、手慣れた形で演じるつもりでいる。そのためこちらは、できるだけ早い段階で交渉することに努力している。さりながら、2000年に来山した文豪ポール・ニゾン氏（Paul Nizon, *1929）は、慣れたスタイルには拘泥しない方針で、素晴らしい朗読をテクストも通訳もなく30分以上続けた。至福の時間であったが、また反面、冷や汗をかいた記憶がある。イングラム・ハルティンガー氏（Ingram Hartinger, *1949）の詩集はぎりぎり手元に届いたが、翻訳がないから、何とか通訳しながら、朗読会に挑んだ。文学作品は同時通訳できる訳がないという当たり前のことも改めて確認できた。つまり、集中して満喫できる朗読会には様々な工夫が必要であるということ、それを心底自覚させられた。

そうこうするうちに山口の朗読会のスタイルが、段々と形になってきた。資料はあっても、作家たちの肉声を中心に作品を鑑賞する。声色は太いが澄んだものだとか、内向的で乾いた声だとか、緊張感のある声なのか、淡々としたうすい声なのか、そういったことは個々の作家の個性そのものである。文学は「語り」で始まるが、読み聞かせの懐かしさ、様々な感情がやがて共振してくる。文学を一種のパフォーマンスの形で、市民にも大学生にももっと身近に体験できる場として、朗読会は企画されてきた。これを可能にしたのは、三つの「コ」である。すなわち、

コラボレーション・コンティヌイティー・コントリビュート、言わば協力・連続性・参加

文化交流のため、ドイツ文化センター（Goethe Institut）やドイツ学術交流会（DAAD）、オーストリア大使館やスイスのPro Helvetia財団などのドイツ語圏と日本の文化機関の援助で文化関係者が来日することは少なくない。しかし、施設も活動もどうしても都会が中心である。この場合、私たちの協会が徐々に築いてきたネットワークがものをいう。例えば、15年間も続いている「オーストリア現代文学ゼミナール」の執行部との協力がある。毎年11月、話題の作家を大使館の補助で招待して、講演・パネル・朗読などからなる「野沢ゼミナール」が開催されるのだが、平行して全国の朗読ツアーも実施される。その朗読会会場としては地方大学では山口大学だけが常連である。

当地では山口日独協会と共に研究室の活動として朗読会を共催してきた。人文学部の講演会の補助と日独協会の援助で、作家への謝礼や宿泊費などの支弁ができる。協会のニュースに催しの案内を載せてもらい、メンバーの積極的なご協力をいただいている。さらに、会場としては大学も市内の文化施設も利用し、できるだけ大学生だけではなく、広く一般市民も参加できることに配慮してきた。大学と市民団体が協力し、キャンパスや町の一角を文学と出会える場として提供するという狙いである。

朗読会を実施するに当たって、別な面においても協力が非常に重要である。日程や計画、ホテルの予約から、作家の出迎えや世話、観光案内、見送り等々、あるいは広告のポスター作成・配布や新聞などとの連絡、そして当日の司会、日本語の朗読、通訳、懇親会などなど……こういった様々な事柄を、同僚との役割分担のおかげで、こなすことができた。朗読会のために送られてきた作品の邦訳を緊急に手直ししなければならないことも何回もあった。個個人を始め、大学や協会、文化財団、大使館などの様々なところのコラボレーションが朗読会を可能にする。

朗読会は、それぞれ毎回ユニークな出来事である。作家一人一人を迎えて、その個性を最大限に尊重してもてなし、快適で満足行く機会にするために力を合わせている。今までに迎えることができた作家についてはここで全ての方を御紹介するのが当然であるだろうが、紙幅の都合もあり真に残念ながら何人かに絞らせていただく。

1944生まれのローベルト・シンデル（Robert Schindel）氏は、個人的に戦争とユダヤ人虐殺の傷を負っている。ユダヤ人の両親は共産党主義者のレジスタンス運動家としてナチスによって迫害され、父親は収容所で殺害された。ホロコーストの忘却や戦後の反ユダヤ主義が作品の中心的なテーマである。だからといって、彼の文学は重苦しくて暗いムードに包まれているわけではなく、ユーモアも含めて想像力に富んでいる。本人も、繊細な一面に加えて非常に生き生きとした暖かい面を持っており、それが表現面でも彼の作品に生命を吹き込んでいる。彼は主に詩人やシナリオ作家として知られているが、山口で行った2000年11月17日の朗読会では初小説であった『出身』（Gebürtig, 1992）からの一節を朗読した。この小説は、

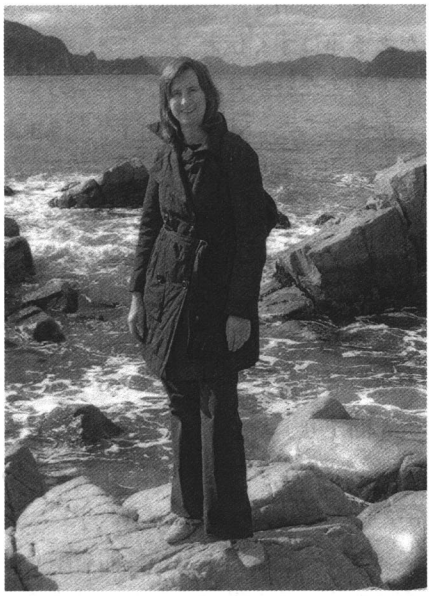
大成功を収め、2002年、映画化もされた。そのプロットは、迫真的な登場人物を通じて、現代オーストリアの生活感と、その一方にある過去の克服との葛藤を描いている。

朗読会の際、彼を研究室に案内した。私が作った朗読会のポスターを見せた。写真の氏はタバコをくわえている。それを見て氏はすぐさまその口元に「×」を書いた。「済みませんでした」と謝ると氏は笑いながら、「どういたしまして。やっとやめたとこですよ」とヘビースモーカーだった彼が愉快そうに話したことを覚えている。彼は、ドイツ語圏の最も重要な文学賞の一つ「バッハマン賞」の審査員も長年務めていて、今日に至るまでユダヤ問題に止まらず、様々な方面に発言力を有し高く評価されている知識人である。

このようなシンデル氏とは、全く違う作風の作家が、ボード・ヘッル氏（Bodo Hell, *1943）である。情報の氾濫や「言葉のゴミ化」を真正面から自作に取り入れて、広告・ニュース・政治家のセリフなどの実用言語を、言葉遊びや響きを交えながら巧みにコラージュ風のテクストに形成していく。最新商品のコマーシャル、政治や社会の出来事、流行のイメージ等からなっている言語的な現世界に対して、人間や自然が置かれている風景やその意味合いに彼は耳を傾けている。前衛的な言語批判の伝統に属するヘッル氏は、無意識的に使われている言葉の意外な側面を掘り出す不思議な魅惑を発揮する作品を書いている。

彼の朗読は、まさにパフォーマンスである。得意のビヤボン（口琴）を口に挟み、文章のアクセントとして相づちの様に奏で、リズミカルでダイナミックな語りである。文章の流れに合わせて、引き締まった身体をしなやかに動かせてお茶目な目つきで聴衆を魅了する。1998年当時は、関西ドイツ文化センターにグラフィック・デザインの作品を展示した女流アーティストのヒル・デ・ガール氏（Hil de Gard, *1964）との共演であった。ヘッルのテクストをイラストにしてスライドやグラフィックのスライドを上映した。元々ダンス教育を勉強した彼女は、秋吉台でいきなり特製のベルトでカメラをお腹に固定して、自動シャッターを押し、トンボ返りを打った。世界中各地でこうやってスナップをとるという事で、回転写真のシリーズを製作中だった。言語・記号・物の感覚を様々なメディアを通じて融合させる芸術家で、ユニークな発想とアイディアに溢れる想像力の持ち主である。彼女は神社の神紙に興味を示し、朝早く山口大神宮の神主の方に作り方を見せてもらった。彼女はヘッル氏と数冊の共作を出版している。

来客に山口の名所を一つでも紹介することは朗読会の醍醐味である。二人を秋吉台に案内したのには特別な理由があった。ヘッル氏は、夏季中はオーストリア・アルプスにあるカルスト高原の牧場で酪農家をしている。落ち着いて作品創作ができるでしょうねと言うと、大忙しで全く書けないとの話であった。牧場と文学の両方の畑で仕事を続けている。昨年は、例の「バッハマン賞」の2006年度選考委員会賞を受賞したばかりである。


萩の日本海を楽しむRöggla氏
（2005年11月）

山口の朗読会には大体10名から最高30名の参加者が来場しているが、その数は決して多くはない。しかし、作家たちは大都会以外の文化も体験できる。ここに山口での朗読会の意味がある。都会の慌ただしさを逃れて、旅行の疲れや催しの緊張を癒し、落ち着きを感じて、山口を満喫する人が多い。朗読に耳を傾ける数人の観客、そして思わず沸騰するディスカッションと、自然と文化の絶妙な調和を誇る山口は、すでに来山した作家及び関係者の間で評判になっている。

勿論、人文学部の行事の一環として、朗読会にはさらに大きな意味がある。普段は本を通じて作品を目にするが、現役の作家と出会い、読書で得た印象や発見を直接話ができることは、文学を勉強する学生にとって極めて稀な機会である。残念ながらそうは言っても、実際に足を運ぶ学生は少ない。そのために、できるだけ事前に授業で次回の作家の作品を教材として使って、学生の関心を高める工夫もしている。2000年に秋吉台芸術村に滞在したアーティスト・イン・レジデンスの詩人と劇作家シュテファン・ヴィースナー氏（Stefan Wieszner, *1964）には、ドイツ文学の授業に参加してもらった。自作を紹介し、学生の翻訳ワーク

ショップに立ち会った。双方にとって、わくわくさせられる試みであった。現在、再度山口に来てさらに翻訳プロジェクトを深めることを彼は計画中である。

フェアディーナント・シュマッツ氏（Ferdinand Schmatz, *1953）のエッセイや詩を授業で取り上げ、翻訳に取り組んだのは2001年の前期だった。5月の朗読会までにあまり時間がない上、作品は学生にやや難しいことも分かった。しかし、未完成でよいからと、私たちの訳を紹介することにした。当日は、学生に日本語の朗読のパートも担当させた。学生たちは、緊張し、硬い表情でやり始めたが、やってみれば、手応えがある事はすぐ伝わった。シュマッツ氏は、日本の大学で教えた経験もあって、学生の努力ににこやかにエールを送った。作品も面白く、段々と熱意が高まる雰囲気の中、観客から自発的な温かい拍手が送られた。笑顔が広まり、ちょっぴり自慢できる経験になった。学生に文学をより近く感じさせるには、こういった朗読会が最高のチャンスだと思われる。なぜなら、文学作品をただ読んで、訳していくだけには止まらないからである。その上に、著者の肉声を聞き、自分たちの訳を聞かせ、そのうえさらに作品についてコミュニケーションができるということは、自分自身が直接、文学と関わりえることである。年に一度のこのようなイベントに、学生がより積極的に取り組んで欲しいところである。その魅力を分かってもらうために、こちらも一層工夫していくつもりである。

現在、一つの試みが進行中である。昨年11月に来山した「バッハマン賞」受賞者フランツオーベル氏（Franzobel, *1967）は、様々なジャンルにわたる作品を創作しているが、子供のための絵本も書いている。そのなかの『鼻』から一節を読んで頂いた。日本語訳は、授業で翻訳したバージョンを元ＮＨＫアナンサー山下稔哉氏に読んでもらった。既に、全作品の和訳を仕上げて、現在は出版社を探しているところである。

2005年は、一週間のあいだに二回も朗読会があった。ヴルフ・ノッル（Wulf Noll, *1944）は11月9日、そして女流作家カトリン・レグラ氏（Kathrin Röggla, *1971）は11月18日に来山した。レグラ氏はニュー・エコノミー氾濫期のシューティング・スターたちの生活ぶりを、醒めた目でスピード感溢れる新鮮な文体で描いていく。言葉実体の新しいアクセスを感じさせる文学である。ノッル氏は、経験たっぷりに落ち着きと微妙な色気を漂わせながら日本の体験を語っている。二回にわたって、合わせて8年間も日本の大学で教鞭をとったことがあるので、「日本」を一つの中心的なテーマにしている。日本の文学に魅力を感じ、特に随筆というジャンルに魅かれて、自作に生かしている。氏は、二年前の「日本におけるドイツ年」の一環として行われた日本各地の朗読ツアーの紀行を書き下ろし、刊行準備中のようである。「山口の朗読会」が文学作品になりつつある。

今後、どういう作家を迎えることが出来るでしょうか。おおいに期待していただきたいと思います。既に次の朗読会を6月に企画しているところですが、これからの課題として、学生と作家の出会いをより親密にし、成果を挙げるためのワークショップ（朗読・翻訳・創作・クリエーティブ・ライティング）に挑戦し、翻訳や作品を何かの形で残せる可能性を探っていこうと考えています。この文章をお読みになった方、そして今後、朗読会のポスターを目にされる方々が、是非一度「山口の朗読会」にお越し下さる事を願っています。

山口市の菜香亭にてFranzobel氏の朗読会
（2006年11月20日）

今まで来山された作家の方々
Peter Rosei 19.11. 1997
Ingram Hartinger: 9.6. 1998
Bodo Hell und Hil de Gard: 21.11. 1998
Marlene Streeruwitz: 24.11. 1999
Paul Nizon: 23.5. 2000
Stefan Wieszner: 14.11. 2000
Robert Schindel: 17.11. 2000
Ferdinand Schmatz: 25.5. 2001
Robert Menasse: 30.11. 2001
Liesl Ujvary: 29.1.2002
Wulf Noll: 9.11. 2005
Kathrin Röggla: 18.11. 2005
Franzobel: 20.11. 2006